

“鶴見川”の概要

鶴見川は東京都町田市の谷戸の湧泉を源流とし、東京都と神奈川県を流れて横浜市鶴見区の河口から東京湾に注ぐ全長は 42.5 km と小ぶりな一級河川である。町田市にある水源は“鶴見川源流・泉のひろば”として整備されており、とにかく静謐。しかし、その本性は洪水・氾濫の暴れ川で、昭和 33（1958）年の狩野川台風では死者 61 人、負傷者 135 人、浸水家屋 24,036 戸という被害を出している。このような背景もあり鶴見川は平成 17（2005）年には全国初の「特定都市河川」に指定されている。現在の鶴見川は典型的な都市河川。流域の土地利用は市街地（宅地等）85%、森林・農地 15% である。ただ他と違う点は流域の急激な都市化の進展だった。急激な都市化は鶴見川を「死の川」寸前に追い込んだ。しかし、下水道整備のおかげで鶴見川は再び甦りつつある。ちなみにサッカーファンのメッカ「日産スタジアム」は鶴見川多目的遊水池事業として整備された運動公園の中にある。



日産スタジアム

環境創造とその課題

鶴見川を甦らせた下水道。この下水道整備について横浜市環境創造局環境整備部で伺ってきた。「ご承知の通り、横浜市では平成 17 年度に下水道局・環境保全局・緑政局の 3 局が一緒になって“環境創造局”を創設し、総合的な環境施策を推進する組織にしています」。環境“保全”ではなく環境“創造”なのだ。下水道はその一翼を担っている。「鶴見川流域における水と緑の回廊像」という資料も頂く。ここでは市民・事業者・行政との連携が強調されていた。しかし下水道独自の課題もある。“中期経営計画 2007”のキャッチフレーズは「安定的・継続的な下水道経営をめざして」だが、課題の一つに電気・機械設備の修繕があげられ、早期に予防保全型の管理に移行する必要があると指摘されている。“改築更新”と“高度処理・合流改善”に迫られているのだ。



神奈川水再生センター